HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	イングランドの一般教育 ： 奇妙な例として
Author(s)	バレッジ, マイケル
Citation	高等教育ジャーナル, 3, 19-25
Issue Date	1998
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29811
Type	departmental bulletin paper
File Information	3_P19-25.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

イングランドの一般教育――奇妙な例として

マイケル・バレッジ
ロンドン大学経済学部

The Curious Case of General Education in England

Michael Burrage
London School of Economics

（翻訳版）

1960年代に新設され，学科制による専門化をさけて特別にデザインされた７つの「板ガラス」大学を別にすると，英国の大学はこれまで一般教育についてはあまり検討したことがなかった。多くの大学は専門家養成のために建設され，ここに入学するための試験も高度に発達していた。一方，テレビやメディア，出版物，図書館資料などの大ざっぱな指標によると，このように一般教育を無視することによって英国は強力な研究大学を発達させはしたが，少なくともこれまでのところ甚だしい被害は被っていないということが示唆されている。英国の大学の，小大学エリート主義，職業的使命観の欠除，学生中心の個人指導体制，大学の自治と談話室の伝統，学生の課外活動，成績評価と試験制度などによる良くない効果は，これまでの歴史ではあまり目立っていない。したがって，英国の経験から次のことがうかがわれる。アカデミック・コミュニティーの中における制度外の総合的なメカニズムが一般教育体制を助けているか邪魔しているかを考えるについては，正規のカリキュラムや教育体制の向こうにある背景をよくみる必要がある。

ここでは，過去の一般教育が，あまりよく計画されていなかったにかかわらず，大学教育の要求に十分に答えられていたかどうかを議論する必要があろう。

１．序論：三角測量における離れた測定点としてのイングランド

18世紀の中ごろ，フランスの測量技師が数十年にわたるフランスの三角測量と地図化の作業を終了したあと，国王ルイ十四世にこう報告した。世界におけるフランスの位置を確認するため国外に一点をさだめ，少なくともう１回三角測量を行う必要がある。こうして彼らは，ほかのどこでもない王立グリニッジ天文台に出かけたのである。一般教育についてイングランドの経験を調べてみようとするのは，このような「三角測量における離れた測定点」の精神にもとづいたものである。

日本は，もちろん長いあいだアメリカを参照点としていたが，ほかにもう１，２点あれば役に立つと思う。

２．イングランドの経験の奇妙さ

まず最初に，一般教育あるいは教養教育という面から見ると，イングランドは極端に奇妙で特異な例であるということを指摘しなければならない。（ところでスコットランドはやや違っている。そのためここでは「英国」の大学ではなく「イングランド」の大学としている。）イングランドは，じつに，一般教育あるいは教養教育にほとんど注意を払うことなしにある程度成功した大学システムを持つ一つの例なのだ！ ここの大学のほとんどは19世紀後半から20世

紀初めに設立され，専門分野を中心に学科として組織された。学科こそが実効的な機能単位であった。学科は学生を入学させ，学生に大部分は学科の基礎をおいている単一の学位を取得した。

例外は1960年代に設立された７つの大学で，よく「板ガラス大学」と呼ばれる(注1)。これらの大学はすべて学科別に専門化しすぎた（思われている）ものと戦うべく設計されていた。そのため大学はそれぞれ違う形で「カレッジ」または「スクール」別に組織され，それがオックスフォードやケンブリッジのカレッジのように分野・学科を超越し横断するよう期待されていた。このような大学のカレッジやスクールには，よく住み込み学生のためのホールがあった。ここでもまたオックスフォードやケンブリッジと同じように機能することが期待されていたのである。

それにもかかわらず，一，二の例外を除いて，数の上では多数の大学での分野別あるいは学科別の専門分化が，中等学校に対して長いあいだ強烈な印象を与えていた。そのため，大学入試レベルの「A」レベル（上級レベル）を目指す16から18才までの生徒が高度に専門化してしまい，一部の教師たちが専門化は14才から15才にまで及んでいると懸念を表明するまでになった。「O」（普通）レベルにおける成績が「A」レベルの選択に影響を与えるというのだ！

とすれば，イングランドは専門化と一般教育不在の弊害を身をもって示すべきだということになる。しかし，このような弊害をはっきりさせることはじつは難しい。

３．社会的および文化的対価の測定の試み

1960年代のはじめに，小説家のC. P. スノーはこの弊害がはっきりしたと思った。記念すべき「２つの文化」という講演で，彼は古典や人文学を学んだだけで科学や技術に対する理解をもたない人々によって英国がリードされてきたと論じた。これこそが，英国の低い経済成長率の主な原因であると彼は考えた。

その通りかも知れない。しかし，当時もっとも急速な経済成長下にあった日本の政官のエリートを見て見ると，それほど科学や技術に通じていた人たちであったとは思えない。大部分は東大の法学部で訓練された人たちなのだ！ リーダーの科学に対する理解度および習熟度とその国の経済成長率との間に因果的関係があるという考えはあまり説得力がない。今日の中国のリーダーたちは科学や技術のことを良く知っているだろうか？

事実は，システム全体のことであれ，一つの大学のことであれ、一つのプログラムのことであれ，ある制度またはプログラムの大学教育の質を評価すること，それへの影響を評価することは非常に難しいということである。

英国人の生活の質やその文化的生活の質をはかるもう一つの可能な物差しから見ると，英国は一般教育を無視してきたことから来る被害をそれほどひどく受けていないということがわかる。80年代半ばの国連の統計によると，英国の公立図書館システムはフランスの２倍以上であり，ドイツ西部地域のほとんど３倍であり，人口が約２倍の日本よりも1/3大きい(注2)。仮に公立図書館がその人口の読み書き能力のある種の指標であるとすると，英国はそんなに悪くない。

本の出版ももう一つの指標となり得る。英国の出版業は人口あたりではドイツよりはわずかに小さいが，フランスよりも大きく，人口あたりではアメリカよりはるかに大きい(注3)。「ライブ」劇場とならんで，本の出版は英国の産業でもっとも成功したものの一つである。英国の放送は国営も民営もどちらかと言えば高い水準を保っており，そういう面から言えば，英国に一般教育がないことから来る被害を裏付けるものは見当たらない。同じことが新聞についても言える。英国にはたしかに世界最悪の新聞がかつて存在し，今でも存在しているが，一方では非常に水準の高い４つの日刊紙があり，それぞれは他のいかなる国の新聞との比較にも耐えうるものである。

科学そのものが被害を被っているという証拠もない。その逆に，英国は科学的創造力や生産性を表わす指標において高い数字を獲得している(注4)。第２次世界大戦いらい，英国は科学の分野で46人のノーベル受賞者を出した。最近数学を含むすべての科学的活動の分野での主要な賞について研究したところ，20世紀全体を通じて英国は人口あたりフランスやドイツやアメリカさえ抜いて第１位であることがわかった(注5)。

こういうものは正しい尺度にならないと考えるかも知れない。もしそうなら別の良い尺度を示してもらいたいと私は思う。しかしそれを採用したとしても，これまでのところ一般教育の不在が英国の社会と文化に破壊的な結果をもたらしたとことにはなら

ないだろう。とすると、なぜそうならなかったかという疑問が生じる。英国は一般教育なしでどうしてこんなに長くやって来られたのだろうか？

４．英国の大学システムの特殊性――およそ1980年まで

一般教育のカリキュラムを工夫する一つの利点は，そのことによって大学が健康的な自己検証を深く行い，その結果を皆の前に出さざるをえなくするということである。このような自己検証は，まず第一に，構成員になぜ自分たちはここに集まったか，われわれを一緒に結びつけているものは何か，どうして別々の多くのスクールに分かれてしまわないかを考えさせることになる。ここで私が同じような検証をする気になったのは，英国には一般教育が存在しないというそのことによる。

なぜイングランドが一般教育なしでこれまでやってこられたかという質問に対する答は，イングランドの大学のある特殊性に起因すると私は思う。この特殊性をはっきりさせることができたら，日本の大学の現在と将来の方向のために何か意味のあることが学べるかも知れない。そしておそらくこの北大における一般教育の組織とその位置づけにも関係するだろう。

第一に，ごく最近までイングランドの大学は非常にエリート主義的であったと言わなければならない。60年代には同じ年代の6%強しか入学させなかったし，80年代に至るまで12%でしかなかった(注6)。大学がそういう選別を行うと，学生の大部分は高度に知的になる。それだけでなく、動機づけがよくされており，エネルギッシュであり，しっかりしているので，カリキュラムや組織の構造についてあまり心配する必要がなくなる。大部分は大学のカリキュラム構造がどうであれ，自分で学ぶようになる。

第二にあげなければならないのは，英国の大学はだいたいにおいて非職業的であり、どちらかといえば世俗的ではなかったということである。大学に入る学生は大部分職業上の資格を得るために大学に入ってくるのではなかった。例外のほとんどは将来の大学教師や講師自身であり，一部はその他の学校の先生になる人であった。その理由は，イングランドにおける重要な職業は，法律であれ，医学であれ，エンジニアリングであれ，建築であれ，会計であれ，すべて実務にもとづいた専門家がとりしきる資格付与のシステムを自分たちで持っていたことである。それゆえ，この世界の人たちは，自分たちの将来の仲間を訓練するということにおいて大学が大きな役割を果たすとは思っていなかった。

このことから，1950年代において，例えばロンドン大学に23の医学部がゆるい形で付属していたのに対し、オックスフォードやケンブリッジには一つも持ってなかったかが説明できる。また，なぜ今日英国の専門家の中にはんぱな学位しか持っていない人が多いか，あるいは学位なしの人が多いかが説明できる。今日，イギリスの裁判官で法学の学位を持っている人はほとんどいない。イギリスの医者で医学博士の人はほとんどおらず，そのかわりMRCPだったり，FRCSだったりする。これは，Royal-College of Physician および Fellow of the Royal College of Surgeons という意味である。1977年になってやっと工科系大学が，工学を専門として入学してくる新入生すべてに学位取得を目指させるべきだと主張するようになった。

このように職業に関する圧力がないことは，ファカルティーに対してだけではなく学生に対してもかなりの自由度を与えていた。というのも，学生たちは職業上の良い資格を獲得しなければならないという圧力から自由であったからである。また彼らは，ある程度は日々の生活費の問題からも開放されていた。イングランドの大部分の学生は，大学時代を通じて（休暇を含めて）フルタイムで勉学に専念できるよう，政府から援助されていた。私が学部学生のころは，大学に在籍しならが働くのはやや異常であり「行儀が悪い」ことであるとさえ思われていた(注7)。

第三に，イングランドの大学はすべて数の上で非常に小さかったということである。その大部分は学生数が１万人以下であった。オックスフォードやケンブリッジより大きいロンドン大学はいつでもなにかしら例外的であるが，それでもこの大学は事実上独立している４つのカレッジと，他の６つの独立するべきだったカレッジと，メディカルスクールの連合体である。60年代に英国が入学者を増やして高等教育のマスシステムを作り出しはじめたときも，大学のあるべき大きさに一定の制限を加える考え方，つまり，（はっきり決められる場合は少なかったとしても）一定のシーリングのもとでそれが実行された(注8)。そのためイングランドは大陸ヨーロッパの都市

型大学やアメリカの大規模州立大学のような巨大なものを決してつくりはしなかった（注9）。

５．オックスフォードとケンブリッジの呪縛のもとで

私の想像では，オックスフォードとケンブリッジ（略してオックスブリッジ）によって無意識のうちに一定の望ましいシーリングの考え方が与えられていたと思う。なぜなら，イングランドの大学システム全体がオックスブリッジの周りに成長し，その影響下にあったからである。ひとつふたつの欠点ゆえにオックスブリッジを批判する人たちの間に，それはあるべき大学の理想やモデルを貫くものとして生き続けていたからである。オックスブリッジの出身者は他の大学をかなりの程度「植民地化」し，他の多くの大学は可能なときはいつでもオックスブリッジの習慣と制度を真似し，借用し，採用し，修正した。

まず，７つの大学を含む多くの大学はオックスブリッジの以下のような伝統に従う傾向があった。大学に行くということは，家を離れるということを意味し，地元の大学には行かないということであり，学生たちが家からも学校からも切り離されて，自分たちが加わった新しいアカデミックなコミュニティーとある程度一体となることを強調するということである。

大学の多くはまたオックスブリッジのチュートリアル（担任教員）システムを採用しようとした。これは，それぞれの新入生にチューター（担任）をつける制度である。この制度は，それぞれの新入生に少なくとも一人のファカルティーがついて責任をもち，日常的に接触して個別指導を行い，アカデミックな経験に興味を持って励むようしむけるとともに，ときには個人的な相談にものってやれるという制度である（注10）。この種の１対１の個別指導は、もちろんエリート的なシステムにおいてのみ可能である（注11）。それにもかかわらず一般教育の観点から見て、この担任教員システムは面白い。なぜなら，奇妙なことであるが，担任と学生との関係は必ずしも専門に基礎をおいたものではなかったのである。指導するものとされるものは，特定の講義やセミナーや課題にしばられていたわけではなかった。個別指導の内容は分野の境界を横断することが多く，そうでなくても境界をあいまいにし，学生と担任の双方にそれぞれの専門の壁を越えてものを見ざるを得ないようにしていた（注12）。

次に，「板ガラス大学」だけがオックスフォードとケンブリッジのカレッジをコピーしようとしたのであり，またどの大学も晩餐や祝典のためにオックスブリッジの神聖な会堂を再現させることができるとは考えていなかった。しかしその一方で，他の大部分の大学には立派なファカルティークラブがあったことを明記しなければならない。これは英語で「コモンルーム」の伝統という。これはファカルティーが日常的に食事をし，お茶やコーヒーを飲み，新聞を読み，おしゃべりをしてくつろぐ場所を意味する（注13）。

加えて，イングランドの大学はすべてオックスフォードやケンブリッジと同じような自治組織であった。ということは，管理事務的な雑用は本当に平等に広くファカルティー全体に割り振られた。そのためファカルティーはいつでも絶えず共同体全体に対する自分の役割というものを意識していた。その結果，学科が完全に自分たちだけのことしかしなくなるということはなかった。これは，他のことは別としてもそんなことをすれば，一緒に食事をしたり一緒に委員会で働いたりしている同僚に対してとりわけ無作法なことになる。

このような高度なファカルティーの自治の背後には，リクレーションやレジャーやスポーツや政治的・社会的活動など，事実上すべての学生の活動が学生の手によって組織されていたという意味での高度の学生自治が存在していたのである。学生のボランティア的な自発的活動を大学が強力に支援していることを示すために，いつもかなりの額の補助金が大学から直接学生ユニオンに与えられた。このような学生の活動は，結果として，学生と学生のあいだのインフォーマルな一般教育のための原動力になったのだと思う。ただしもちろん，その効果を測定することは難しい。

最後に，イングランドの大学の規則は，形式的で官僚的なものではなく，インフォーマルで条文化されておらず，また規範的なものでもなかったということを言わなければならない。受講登録というようなものもほとんど無かったから，学生は面白いと思った講義に自由に気楽に出ることができた。そのため好奇心を持った学生に対しては日常的で自発的な一般教育ができたのである。さらに，試験のシステムは連続評価の形をとらず，最後の大きな一回だけの試験

ですますことが多かった。このやり方は悪いもののように今では考えられており，採用されなくなってはいるが，学生が大学時代に他に興味のあるものを追い求めたり熱心になったりするための自由をかなりの程度与えていた。

少し前に掲げた問題に対する私の答は以下のようなものである。くるみの殻のなかで，イングランドの大学は，自分自身のなかに作りだした強い共同体意識のゆえに，一般教育なしに長いあいだやってこられた。インフォーマルでかつ総合的な組織が，分野あるいは学科によるの専門の細分化の影響をやわらげてきた。このような組織はしばしば特別な考えもなしに良しとされていたし，たいして重要ではないと思われており，体系的なカリキュラムや正規の教育的関係とは何の関係も持たなかったのである。

このような組織は，学生がそのなかに一時的にしかとどまらないにもかかわらず，何か学者の大きなコミュニティーに属しているという雰囲気を作り出していた。それは同様に学生たちが教室外で先生たちとある程度ふれあったり学生対学生の相互学習を推奨したりする一方，「自分は先生たちが教室で教えてくれることだけを学びにここにおり，先生たちが教えてくれたことだけについて試験される」という大学教育に対する「機械的」な態度をとらせないようにもした。これは，研究指向の文化や学習文化を推奨し，将来ノーベル賞を受賞するような力をもった学生たちの気質に明らかにうまく合っていた。またそれだけではなく，大学に入ったばかりの学部学生の気持をも動かした。

私はこれまで過去形を用いてきたが，これは英国の大学が18年におよぶメジャーとサッチャー政権下で一貫した攻撃にされされた結果として，今ではとくに自治的ではなくなって，中央から非常に官僚的に扱われるようになったからである（注14）。80年代と90年代に，英国はその大学を再建した。いやむしろ再創作したと言った方がよいかも知れない。英国は自分自身の「文部省」を作ったが，これはソビエトに匹敵するものと言った方がより適切だという人もいる（注15）。それゆえ，わたしがこれまで述べたような（教育）組織の多くは，今は退きつつある。

７．この経験から（もしあるとして）何を学ぶべきか？

イングランドの過去のこのような経験から何か学ぶことがあるかと疑問に思っているだろうか？ 大学教育におけるエリート的なシステムは過去のものであって，それに戻そうとは誰も思っていない。どこであれ最良の大学というものは，必然的にマスシステムのなかでエリート的なものを作り上げるものだとしてもである。わたしはけっして，先ほど丹保総長が述べたようなアカデミックなビジョンが必要でないなどと言おうとしているのではない。また，創造的なカリキュラムや一般教育が必要でないなどと言おうとしているのではない。それは私の意図ではない！

私が言おうとしていることは，大学というものは，正規の教育モデルあるいは経営モデルを越えたところにある種の生命を持っているということ，そしてそれを理解するためには，何か共同体としての大学の特殊性であるかを明らかにしなければならないということである。とくに，ここでの議論の内容に沿っていえば，一般教育の精神と目的にかなった特殊性をはっきりさせなければならないということである。

アウトサイダーとしての観察をお許し願えるのであれば，医学部は例外として，日本の大学は職業に直結した教育，すなわち職業的技能や情報を教えるよう雇用者，学生，その両親などから強い圧力を受けているようには見えない。これは日本の大学の驚くべき利点の一つであり，その強さの一つかも知れない。同様に，日本の学生は大学で良い成績をあげ，それによって最良のプロフエッショナルスクールに入ったり最良の仕事を得たりしなけばならないというプレッシャーも感じていないようである。これがアメリカの大学と非常に違っている点の一つである。

また少なくとも一般教育に関すかぎり，今こそ日本の大学に自治的なアカデミックコミュニティーを作り出すチャンスである。「文部省」は明確な方針をもっておらず，明確な指示を与えておらず，この点に関しては強制力を発揮していない。最近９つの日本の大学を見てまわったが，それぞれのやり方でかなり仕事を進めていると思った。

さらに，ファカルティークラブや学生のスポーツ活動やボランティア活動，また土曜講座などここでは触れなかった他の学校などが日本のあちこちですでに盛んである。その在り方はイギリスとまったく同じではないが，それは大した問題ではない。

そのほかの変化も，「教育」あるいは「学校教育」文化に対立するものとして，「学習」の方向へと大学を

向かわせている。イングランドの大学は，最良の中等学校群に助けられてきた。「A」レベル試験にもかかわらず，その生徒たちに学校の教室をはなれて大学で勉強するよう準備させてきたからである。そして，いずれにせよ「A」レベル試験は（日本の大学の入学試験がかつてそうであり今でもそうであるように），難しい記憶力の試験ではない。またイングランドの大学は，学部学生に対する大学院生の数が多いということにも助けられていた（注16）。その両方の点において，日本の大学は変化しつつある。入試をより人間的な適切なものに工夫しようとする動きが，北大や他の大学にある。大学院生の数は急速に増加しつつある。

終わりに，雇用者と被雇用者という決して仲のよくない環境において共同体の精神を作りだす日本企業の能力が、世界中で知られており賞賛されているということを私は明記したい。日本の大学はこれに注目せず良いと思ってもいない。おそらく，このことを良く知らないかあるいは良く研究していないせいだと思う。しかしこの利点を公平に取り上げない理由はない。一般教育はこのような新しいアカデミックコミュニティーを創造する上で鍵となるものであるが，他の大学の組織も同様に重要であると思う。

注

1. ヨーク，ケント，カンカスター，サセックス，イーストアングリア，エセックスおよびウオーウイック。例外として，より早い1946年に創設されたキール大学がある。「板ガラス」という言葉は，これらの大学のキャンパスの建物に板ガラスがよく使われたことを指す。これはまた19世紀の後半に創設された大学の「レンガ」やオックスフォードおよびケンブリッジの「石」と区別するためであった。しかし今日では，オックスフォードやケンブリッジにも「板ガラス」と「レンガ」がある。これらの大学で何が成功し何が失敗したかについては，*Higher Education Quarterly,* **15** (4), Autumun, 1991の特別号にまとめられている。

2. “Statistical Year-book.” United Nations, New York: 1983-89. 近年，国連はこの種のデータの刊行を止めている。

3. 同上

4. サイテーションインデックスとは，ある科学論文が（できれば）世界規模で他の研究者によってどの程度引用されているかを示すもので，その論文のおおよその価値や有益さを示すものと理解されている。もっとも最近の評価では，すべての引用の49%をアメリカが占めてトップであり，英国が9.1%で２位，日本が7.7%で３位であった。この評価においては英語の問題からくる偏りをなくそうとしているが，それが成功しているかどうかは想像するしかない。人口あたりでは，非英語国のスイス，イスラエル，スウエーデンがトップになっている。May, Robert M. “The scientific wealth of nations,” *Science* **275**, 1997.

5. p. 795, 同上

6. ところで，より貧しい家庭的環境にある子弟が入りにくいという意味で大学生がエリート的であるということを示す証拠は現在のイングランドにはない。もちろん，すべての大学において見られるように，階級によって大きな違いがあったが，他のヨーロッパの諸国にくらべておそらくもっとも開放されており，実力主義的であった。Müllerは1985年に第二次大戦後の高等教育への進学についてヨーロッパ諸国の比較を行い，英国はそのなかで「もっとも社会的選別をしていない」国だということを見い出した。彼は，ヨーロッパ諸国は「非常に広い範囲に分散しているが，その両極端はフランスとイギリスである。フランスでは大学卒業生の55パーセントは２つの（サービス）階級のうちの１つで成長した人たちであり ..... イギリスではそれがわずか35%である」と述べている（引用：Halsey p. 266）。

7. 70年代にハーバードの教授の一人とマサチューセッツ州ケンブリッジのレストランで食事をしているときに，ウエイターがその教授の学生の一人であることを知ったときに受けたちょっとしたショックを私は今でもおぼえている。

8. 1958年に，ロンドン大学でも大きなカレッジの一つであるインペリアルカレッジの学長は，いかなる大学であろうともその最大の大きさは4,500人であるときっぱり宣言した。サセックス大学の創立時の副総長は「3,000人という数にほとんんど神秘的な意味を付与した」とその場に居合わせた一人が回想している。p. 328-329, Lord Briggs, “A founding father reflects,” p. 311-332, *Higher Education Quarterly, op. ct.*

9. 1990年までにケンブリッジは14,700に，オックスフォードは14,800に成長した。それより大きな大学はロンドン大学だけで59,200であるが，そのなか

で最大のユニバーシティカレッジは，すべての種類の学生を合わせて9,100にすぎない。“Higher Education Statistics for the United Kingdom.” HMSO, London: 1994.

10. オックスフォードのトリニティーカレッジの学長は，最近カレッジシステムと担任による授業を「オックスフォードの教育の２本の柱」と言った。Michael Beloff, *The Times*, July 25th, 1997. 担任と学生の関係が，一生続くことがよくある。クリントン大統領がオックスフォードへ帰ったとき，まず最初にむかしの担任に会いたいと言った。私自身の場合はそれほど華々しくはない。私の教え子の一人が卒業して10年ほどしてから，Angry Brigade というテロリストグループのメンバーになった。彼女が逮捕されて有罪になったとき，大学と報道関係者の両方が10年前の彼女の担任としてその動機について何か特別の洞察があるはずだと私に言ってきた。

11. 1979年においてイングランドの大学のスタッフと学生の比は 1: 9.4 であった。

12. 私の経験では，専門に特化したりテーマに沿ってしぼり込もうとするのは学生の方である。おそらく試験の助けになるからだろう。

13. 大学にはバーもたくさんある。私自身のささやかなスクールにもスクールが経営するバーが３つある。スタッフ用と，大きな学生用と，両方のためのものの３つである。オックスフォードのワインセラーは伝説と神話のもとである。あるいは，伝説と神話のもとであったというべきか。

14. このような変化については，北海道大学の高等教育機能開発総合センターのセミナーでくわしく報告した。 “British Universites Before and After Mrs Thatchr,” July 1997 （メモ）。

15. １例として次の文献を参照：Ryder, Anderew “Reform and UK higher education in the enterprise era,” *Higher Education Quarterly* **50** (1), January, 1996.

16. 工業化された諸国のなかでは英国がもっとも高く，フランスの18.8%，アメリカの15.6%，日本の6.1%に対して英国は37.5%である。 p. 8, “New Faces of Japan's Universities: A Brief Introduction to Advancing Reform,” Center for Research & Development, University of Tokyo, 1997.

（訳：小笠原　正明）